

## 高等部

### この1年間の取り組みについて

高等部部长 佐藤史伸

2024年度は、自由学園にとって歴史的な1年となった。中等科・高等科が男女共学となり、創立以来初めて「共生共学」の歩みを始めた年である。長く続いた男女別学からの転換は大きな挑戦であったが、生徒たちはその変化を受けとめ、新しい関係性と学びの在り方を築いてきた。この一年間はまさに、新たな一歩を踏み出した「始まりの年」となった。

#### ■最初に

共学1年目の高等部は、日々の生活の中で「互いを知り、認め合い、共に生きる」ことを実践してきた。学年・性別を超えた協働は、当たり前でありながら新鮮で、互いの違いが尊重されることによって学園生活に豊かさがもたらされた。文化祭、体操会、クリスマス行事などでは、従来の形式を継承しつつも、共学ならではの多様な表現や協力の姿が見られた。体操会では男女一緒に行う種目があり、女子だけで行ってきたメイポールダンスに初めて男子が加わったことなど、新しい風を吹かせてくれた。文化祭では、展示や発表において男女が自然に役割を分担し、互いの強みを生かし合う場面が多く見られたことは、新しい学園文化の兆しといえる。クラスや委員会での活動においては、一人ひとりが自分の得意や思いを活かし、社会の縮図とも言える学びの場がつくられていった。

#### ■高等部の生活について

##### 【授業】

2024年度の授業は、共学の間を活かした多様な視点が交わる学びが特徴となった。国語や英語の授業では、グループ討議において多様な意見が交わされ、歴史や社会科では、ジェンダーや平和をテーマにした議論が深められた。探求の時間では、生徒が自ら問いを立て、調査・議論・発表を行った。地域社会との連携も進み、地元の環境問題などに取り組む活動や、高2高3が行った飛び級社会人(共生学)では、学びが現実社会とつながっていることを実感する機会となった。異なる価値観や背景を持つ仲間と協働することで、課題解決の幅が広がり、学問的探究心だけでなく他者理解の力も深められた。また、持続可能な社会や平和

について考える機会が増えた。

##### 【礼拝】

礼拝は、共学となった高等部において心を一つにする大切な場であった。男女が共に集い讃美歌を歌い、語られる言葉に耳を傾ける時間は、コミュニティとしての一体感を強くした。日番による感想の共有は、性別や学年を超えて共感や刺激を生み出し、互いの生き方を見つめ直す機会となった。礼拝を通して、「自分の存在を愛すること」「他者を大切にすること」が具体的に学ばれた。また、創立記念日の礼拝では、自由学園の歴史を振り返りつつ「共に学ぶ」ことの意味を改めて心に刻んだ。クリスマス礼拝では全員で讃美歌を歌い、共学初年度にふさわしい「ともに生きる」喜びを実感する時となった。

##### 【食事】

食卓は共学生活の象徴でもあった。男女が自然に混じり合い、同じテーブルを囲むことで、会話の幅が広がり、生活の中での相互理解が深まった。互いを理解し、学年を超えたつながりが広がった。有機食材を取り入れた特別献立の日や、生産者との交流の機会も設けられ、食の学びは単なる栄養摂取にとどまらず、環境・健康・持続可能性への意識を高めるものとなった。

##### 【労作(自治区域)】

労作は、自由学園の教育において欠かせない生活の柱である。2024年度も、生徒たちは学園内の区域を分担し、自らの手で環境を整えてきた。夏の草取りや草刈り、秋から冬の落ち葉掃きなど、季節ごとに変化する自然に応じた働き

が続けられた。共学化によって役割分担が多様化し、互いの働きを尊重し感謝する雰囲気が広がった。

#### 【委員会活動】

委員会活動は自治生活の中心であり、共学化に伴い新たな工夫が求められた。各委員会は期ごとの目標を掲げ自治活動を進めた。

1 期:「古きを愛し、新しきに挑む」一つひとつの生活を丁寧に考える取り組みを行った。

2 期:「火を起こす」委員決めのことなど、スタートして見えてきた日々の生活の課題の見直しを行った。

3 期:「心を燃やす」行事・イベントなど自分の属する社会に目を向けるための取り組みを行った。

4 期:「共に創る」高等部に属する皆の意見を反映させる取り組みを行った。

5 期:「愛ある五期」普段の生活・足元をしっかりと見直すこと、引き継ぎを丁寧にという思いで取り組んだ。

それぞれの期で、自治の中心として、委員会が力を発揮してくれた。どの委員会も性別や学年を超えた対話を重ねて活動を進めた。意見の相違を乗り越える中で、「共に創る自治」の力が確かなものとなった。

#### 【寮生活】

寮生活は、共学化によって新たな課題と喜びを伴った。生活の場を共にしながら、一人ひとりが自らの役割を果たし、協力し合う姿が見られた。上級生が下級生を支える伝統は継承されつつも、互いの違いを尊重し、共に成長する文化が育まれた。環境整備やルールづくりも生徒自身が主体的に関わり、まさに自治の実践が日々の生活の中にあった。

#### ■さいごに

共学1年目の歩みは、挑戦の連続であったが、同時に「違いを豊かさに変える力」が確かに育まれた1年でもあった。委員会活動では、高等部3年生が中心となり、「つながる」を大切にし、「共に創る」ことを意識して取り組んでくれた。そして、学年を超えて自治生活を進めていった。その営みの根底には、互いの存在を尊重し合う姿勢があり、これこそが共生共学の意味を体現していたといえる。

自由学園高等部は、これからも「愛に溢れるあたたかい社会」を目指し、共生共学の道を歩み続ける。今までの歩

みに感謝し、生徒・保護者・教職員、そして学園に連なる全ての人たちが信頼しあい、未来に希望をつないでいきたい。